# 会員のページ

## 学会発表と言葉

小沢丈夫

バイリンガルとは？との問いに対する答えは2カ国語を話す人であるが，モノリンガルとは？の答えはアメリカ人だというジョークがあると聞いた。アメリカ人の外国語下手を自虐的に表したものだが，英語が事実上の世界共通語となっているから，彼らはあまり痛痒を感じないであろう。日本人の英語下手も有名だが，南アフリカのホテルでカナダ東部からの泊まり客の英語が通じず，居合わせた日本人客に通訳を依頼したという話を読んだ。筆者によれば，英語もなまりが多いから，世界共通語はむしろ日本人のようなブロークンイングリッシュだという。

学会発表における言葉の問題も今後ますます重要な問題となろう。この意味で筆者が昨年参加した海外での3つの学会は大変興味深いものであった。それは，中国の化学熱力学と熱分析の学会（北京，1998年8月23日～26日），第7回欧州熱測定シンポジウム（ハンガリー，8月30日～9月4日）とイタリアのAICAT-GICATの熱測定の大会（ローマ，12月14日～18日）である。欧州熱測定シンポジウムの共用語が英語であり，欧州からの参加者の大部分が流暢な英語で発表，討論を行っていた。以前の欧州の会議より一層流暢になり，実生活で欧州統合が進展して，英語が一層身近なものとなっている様子をうかがわせた。

北京での会議の英語名称は，The 9th National Conference on Chemical Thermodynamics and Thermal Analysis & Beijing International Hua Xia Conference on Thermal Analysis and Calorimetryである。Hua Xiaは華夏であり，別の表記ではInternational Chinese Conferenceとされていた。つまりChinese National ConferenceとInternational Chinese ConferenceとがJointしている。また，共用語はいわゆる北京官話であるとサーキュラーに書かれている。Jointしている前者の会議はわかるが，後者の意味がつかみかねた。組織委員の一人に，東工大に留学し，現在オーストラリアで研究している曹さんがいたので，この意味を尋ねたところ，中国語を話す研究者の会議と理解してもらいたいとのことであった。台湾はもちろんのこと，世界中で活躍している華僑や在外研究者の参加を期待して，このような企てがなされたという。移民しても決して中国語などの固有の文化を捨てない華僑の存在を抜きにしては考えられない。発表238件の内，海外在住中国人から13件，外国人から6件の発表が有った。200人以上の中国国内参加者に対して，米国から5人，台湾と日本から各4人，ハンガリー，オーストラリア，カナダ，ホンコンから各1人，合計17人の海外参加があった。

一方，ローマでの会議では，イタリア国内の会議でありながら，要旨集の92.7％は英語で書かれており，イタリア語はわずかに9件である。そればかりではなく，座長も大半は英語で会議を司会しており，発表者もポスター発表を含めて少なくとも半分は英語で発表している。筆者のような国外からの参加者には大変有り難いことであるが，イタリア国内の会議であることを忘れさせるものであった。そこで参加者中の外国人の割合を尋ねたところ，イタリア人参加者280人に対して15カ国，37人の海外参加者があり，約12％に達していた。ここでも欧州統合の実態を垣間見る思いがした。

これらの会議における言葉は，それぞれの事情を反映したものであるが，日本での将来はどのようになるのであろうか。海外からの参加者は当然増加しつづけるであろう。英語も共用語として公式に表明し，要旨集の執筆要領も英語でも書けるように明記すべき時期に来ているのではないだろうか。聴衆によっては日本人による英語の発表があっても良いのであろう。この場を借りて問題提起したい。

千葉工業大学：〒275-8588　習志野市津田沼2-17-1
Department of Electrical Engineering, Chiba Institute of Technology, 2-17-1 Tsudanuma, Narashino 275-8588, Japan